

農村青年社、沈滞状況からの登場と実像

三原容子

1931(昭和6)年、農村青年社はアナキズム運動の沈滞状態のなかで結成され、活動を開始した。当時は八太舟三や岩佐作太郎らの「純正アナキズム」理論の影響が強く、実際運動が軽視された時代で、農民に対しては「農民は支配搾取されている」と宣伝するくらいしかされていなかった。

2月に宮崎晃執筆によるパンフレット「農民に訴ふ」が出版される。自給自足・共産・相互扶助を三大眼目とした農民自身による経済的直接行動を起こすべきと語り、もし塩が不足すれば隣の村から借りてくれば良いというような具体的、現実的な内容も含まれていた。宮崎、星野準二、鈴木靖之、八木秋子らによる全国各地での活動が始まった。「農村青年」などの雑誌が発行され、長野県の一部の村では「農民に訴ふ」が公報に転載されて広く読まれた。

まもなく宮崎の「最近運動の組織並びに形態についての一提案——自主行動の強調」も出た。従来の黒連・黒色青年連盟)、自連(全国労働組合自由連合会)の運動をきびしく批判して解散を求め、「自主行動」「自主分散」の運動を提唱した。これはアナキズム原則に則る方針であり、2年後に結成される日本無政府共産党が「無政府共産」を名乗りながらも原則と反対の方向に転じたのとは対照的である。なお、軍事施設などを破壊し重要都市を焼却することによって自給自足のコミュニティを実現しようという提案(いわゆる「信州武装蜂起」計画)もあったが、合意はなされず、後になってから権力に都合良く利用された。それから半年余りで、運動に必要な資金を調達するために始めた窃盗活動のために、主要メンバーは逮捕されてしまう。

一方で、結成以前から盛んに執筆活動をしていた鈴木は、機関紙発行などを担当する関係で信州暴動計画の相談や資金獲得活動に加わらなかったため逮捕を免れ、1932年9月、獄中の同志に相談することなく解散声明を出した。その後も全国各地での活動が継続されるが、1934年の長野県内の検挙で活動は終了したと見てよいだろう。

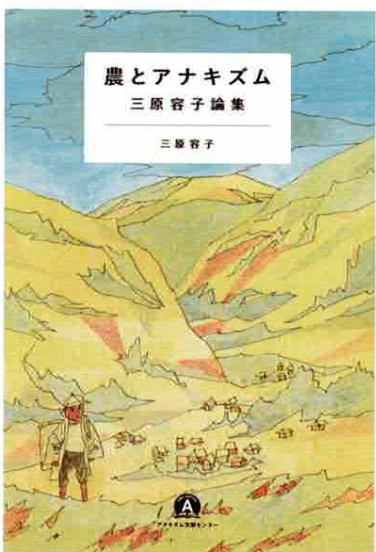
1935年暮れに全国のアナキストが一斉に検挙される。日本無政府共産党事件が発端だった。功名心あふれる特高課長や思想検事によって、すでに活動を停止し窃盗罪での服役を終えていた農村青年社が、治安維持法の「事件」としてでっち上げられたのだ。獄中の鈴木は膨大な手記を執筆した。取調べ側ではそれを事件の説明に利用し、1936年の内務省刑事局思想部『農村青年社』資料』は鈴木の手記を主資料とし、宮崎と鈴木の二人を首領とみなした。

戦後、宮崎・星野らの主要メンバーは事件全貌を正確に伝えようと精力的に資料を収集し整理した。その結果、1972年に農村青年社運動史刊行会『一九三〇年代に於ける日本アナキズム革命運動 農村青年社運動史』、1991〜94年に『農村青年社事件 資料集』I〜III(1997年には「別冊・付録」も)が出た。後に保阪正康『農村青年社事件』昭和アナキストの見た幻』も公刊された。かつて権力が描いた事件像はこうして訂正がなされた。

三原容子(みはらようこ)

1955年名古屋生まれ。京大教育学部卒業、京大大学院教育学研究科博士後期課程修了。大学・短大の非常勤講師、人権問題の研究所・研究センターの研究員等、関西での生活を経て、2001年の東北公益文科大学開学と同時に酒田に移り住む。2014年に早期退職し「庄内地域史研究所」の表札を掲げる。

近年は明治初期のワッパ騒動、満洲農業移民送出など、近現代庄内地域史の検証や顕彰に関わってきた。地元の木と職人で建てた家に住み、47歳で始めたピアノを趣味とし、巨大風力発電建設計画を問い直す活動にも関わっている。



「農村青年社について」「農村青年社と現代」を収録した三原容子『農とアナキズム 三原容子論集』(当センター発行)もぜひ併読ください。

星野準二 HOSHINO JUNJI 1906-1999

1906年10月28日、鹿児島県肝属郡垂水町田神(現垂水市)生まれ。福山中修了後、親戚の医家を頼りに家出上京し、薬局生に。京都市の南病院を経て、24年大阪市の内科薬局生に。文芸思想書等を渉猟する一方、個人雑誌の発行を機縁に大阪在住の文学青年、入江一郎、正木久雄、高橋和之らとグループを形成アナキズムの関心を強くする。27年、再上京、入江らとアナキズム文芸誌『行動者』を発行。直後、AC学生連盟の中心にいた早大生鈴木靖之の来訪をうけて以来、学連の相沢尚夫、榎本桃太郎、藤島好夫、二見敏雄らと交流。28年4月、鈴木と共同の雑誌『北極星』『無政府思想』、次いで鈴木たち有志と『黒色文芸』創刊(編集発行人)。「廿世紀」「黒蜂」と合同し、29年2月に思想文芸誌『黒色戦線』を創刊した。

30年3月末、八木秋子を紹介して潜伏中の宮崎晃と初対面、従来の運動形態に対する批判から『黒旗』5、6月号に宮崎の「農民に訴ふ」を連載。8月、相沢らの新訳でクロボトキン著「パンの略取」の全文伏字無しの発行するも即日発禁、拘留される。

31年1月、八木秋子宅に潜む宮崎を訪ね「農民に訴ふ」の完成稿を見せられ、『黒旗』第13号に掲載、「農民はその地にいなから自由コミュニティの創造樹立が可能だ」と説く現実的的革命論は、開眼の檄書となる。次いで2月12日、「農村青年に訴ふ」著者鈴木靖之を招き、宮崎、星野、八木と、20日に望月治郎を加え、『農村青年社』創設を決定、地理的自主分散自由連合組織の全村運動を開始した。3月、長野県富田村(現伊那市)の農民同志の伊沢八十吉、上諏訪の島津徳三郎、山田彰らと熟議。32年1月、運動資金事件で平松、宮崎が逮捕され、3月星野単身で諏訪を訪れ『信州自由連合』発刊を決定。4月、星野は望月、八木、和佐田芳雄と同事件で逮捕され、入獄した。

34年1月小菅刑務所を出獄。35年10月、旧友の二見(無政府共産党)がきて長野に逃亡させた。11月に愛知県内の検挙に遭い、のち農村青年社事件として長野県特高課に引致される。37年4月、長野地裁判決、懲役3年、犯人蔵匿2カ月加重。10月、東京控訴院判決、懲役2年6カ月、蔵匿同2カ月に服役。72年、『農村青年社運動史』刊行に参画。91年からは『農村青年社事件・資料集』の編集執筆、全3巻の刊行を果たす。1996年5月3日逝去。



1934年8月、28歳の星野(手前)と21歳の船木上(後ろ)。名古屋新栄ミカサ写真館にて。船木が実父の勤務地・朝鮮釜山の生家に帰る途中、第一次農村青年社事件(資金活動で検挙)の出所後に名古屋にいた星野を訪ねた際に撮影した。

私は星野さんの魅力をつたつあげたい。ひとつは「優れたネットワーカー」であったこと、ふたつめは「事実を精確に記録すること」に徹底されたことである。そして共通する事は誠実さである。『農村青年社事件・資料集』刊行に向けて長年にわたり共同作業を行ってきたその間、ひたすら人と人を繋ぎ、しかも単に新しく繋ぐことにとどまらず、そこから何か形を生み出すところまで徹底された。そのような長い長い時間をかけた星野さんのネットワークづくりによって、文字通り縦糸と横糸を繋いで資料集が編まれたことを私は見てきた。そして、人に対する誠実な姿勢は、おそらく戦前のあの頃、信州にいた農村の活動家、伊沢八十吉さんらを訪ねて同志としての交わりを深めていた時と変わることなく現在に至っていることも知った。

相京範昭「はじめに」『資料集 別冊・付録』より一部抜粋



1934年3月10日、洗足公園にて。第一次・農村青年社事件(資金活動)出獄記念。前列左から和佐田芳雄、鈴木靖之。後列左から太田光衛(燎原)、望月治郎(秋幸)、鈴木清士、星野準二。「出所して三月中旬、目黒不動駅前近くの船木幾政宅に集合し、鈴木、星野は出版活動の再開について協議」



1986年9月、北茨城市華川町上小津田の山裾にある鈴木靖之の墓への小道、瑠璃沙華が咲く中で。星野は広島のと佐田芳雄とともに、信州の南澤製炭松や伊沢八十吉、茨城の別所孝三、鈴木靖之の眠る北茨城市、東京の山田彰、故宮崎晃の墓前など農村青年社ゆかりの人・地を二十日間にわたり行脚した。

八木秋子

YAGI AKIKO | 1895-1983

1895年9月6日、長野県西筑摩郡福島町（現木曽郡木曽町）生まれ。18年に結婚で上京、出産。作家小川未明を頻繁に訪ね大きな影響を受ける。結婚生活に絶望し、子どもを置いて家出。子捨ての体験は生涯の行動のパネになった。25年、東京日日新聞学芸部記者。八太舟三、宮崎晃らを知りアナキズムに共鳴。日立争議応援で逮捕され、仮保釈中だった宮崎を匿い同居。28年から編集を務める『女人芸術』ではアナ・ボル論争の発端となる「藤森成吉氏への公開状」など、ほぼ毎号執筆や座談会などに活躍。30年1月、高群逸枝、平塚らいてう、望月百合子らとともに「婦人戦線」を発行、社会時評や小説、ウクライナ・コンミュン」などを書いたが、次第に実践活動への道を模索する。

31年2月、宮崎晃、星野準二、鈴木靖之らと従来のアナキズムの啓蒙主義的運動への批判から「農村青年社」を創立した。結成早々、長野県富県村で講演するなど活発に動く。8月、浅間温泉会議で長野県下革命的単位区画設立を鷹野原長義らに提唱。32年1月、宮崎らが運動資金関係の事件で逮捕され、男装して裁判所送りを狙い宮崎奪還を計るも果たせず、4月に同事件で星野らとともに逮捕。懲役6カ月、執行猶予3年で釈放。釈放後は獄中の宮崎とも精神的に乖離を覚え、新聞連合特信部（現共同通信）に記事を送るなどの仕事に従事していた。

35年11月大阪に移住し日刊業界紙で働いてまもなく、二見敏雄、相沢尚夫らによる無政府共産党事件のあおりで農村青年社事件が惹起され、12月25日、宮崎、鈴木らとともに長野県警に逮捕される。ただ1人の女性、かつ年長者として新聞報道で大きく扱われた。長野地裁懲役2年6カ月、二審の東京控訴院では懲役1年6カ月の判決。38年に出版後、満州に渡り満鉄の留守宅相談所相談員として勤める。引き揚げ後は東京の母子寮で寮母をつとめ、56年には母子更生協会を設立し、地域の相互扶助的組織を目指す。75年、八木の文筆活動の伴走者となる相京範昭と出会い、77年7月より通信「あるはなく」発行全15号。1978年から著作集『近代の（負）を背負う女』夢の落葉を『異境への往還から』刊行。1983年4月30日逝去。



八木は飯田豊二、秋山清らの「解放劇場」に参加を求められ、アメリカのアナキスト、サクコとバンゼッティに対する冤罪事件を扱った劇、シンクレア作「ボストン」の上演（築地小劇場／1931年2月7～8日）で主要な役コルネリアを演じ好評を博した。同月の12日、八木は宮崎、鈴木、星野と農村青年社を創設する。

八木さんは着物で、女の人の講演なんていったら珍しいから、どんなことを話すんだろうとか。みんな生活に追われていたから、どこかでほけ口が必要だったし、そういった講演に対してみんな一生懸命に聴こうとしてました。四五百人集まったでしょう。会場満杯で、主に女工さんだったです。八木さんの話は地道でしたよ。女の人もいろんなことに関心を持たなければいけないとか。講演だけじゃなく、村の人を訪ねたときの座談に八木さんは説得力がありました。人に対しては優しさがあって、権力には強かったです。（南澤装束松）

相京範昭「気配を残して立ち去った人たち—信州佐久の農民と農村青年社—」（『葉ひろい』）より南澤の聞き書きを一部改変



1978年4月29日、八木秋子著作集『近代の（負）を背負う女』出版記念会（東京文京区・新江戸川公園会館）。戦前に共闘した仲間たちと。八木の後ろ4人は左から南澤装束松、小野ふみ子（小野長五郎の妻）、星野準二、山田彰。散会后、星野は黒色戦線社（戦後）の大島英三郎から資料集刊行を迫られた。



1982年3月、都立養育園にて。窓の外のベランダで遊んでいる子どもを見ている八木。撮影は相京範昭。77年から相京の編集による八木秋子通信「あるはなく」は刊行される。「『あるはなく』の出生は私じしんの何ものかを露呈し、善も悪も美も醜もあるがまに投げだして知己友人の前に女性の一個の生き様として批判を乞いたい希いがあった」（八木秋子「わたしの近況」『あるはなく』第3号／77年11月）。「彼女のアナキズム運動上のことから出発せずに、私の独善で彼女の個人的な体験からこの通信を出発したのは、真の思想とは何か、ということを通じて確かめたかったからかも知れない。」（相京範昭「協力者の一人として」同第2号／77年9月）